瀬戸SOLAN小学校第１学年・学年通信

コスモス・ハーモニー

2022 Dec. 19

No.104

「楽しい」を求める→「楽しむ」を創り出す

「世界三大幸福論」と呼ばれる３冊の著作があります。

同じタイトルの本ですが、作者も国も年代もすべて異なります。

スイスのヒルティ。

イギリスのラッセル。

フランスのアラン。

全員、「こうすれば幸福になれるんやで」ということを同じタイトルで書いていて、世界的に広く長く読み継がれているため「世界三大幸福論」と呼ばれています。

色んな人に話して分かったことですが、好みは人によってはっきり分かれます。

以前、この話をした時、友人はラッセル派だと話していました。

故郷の教員仲間には、ヒルティ人気が結構高いです。

ちなみに、私はアランが大好きです。

例えば、ヒルティの幸福論を簡単に紹介してみます。

ヒルティは、幸福になる為の重要な要素として「仕事」をあげています。

よく「仕事＝苦痛」「休息＝幸福」のように思っている人がいますが、ヒルティは「それはちゃう！それはちゃうで！」と明確に否定しています。（そういえば愛知に来てから関西弁を話す人が意外に多くて驚いています。）

仕事の中にこそ人間の本質があり、本当の喜びや幸福感は働きの中にこそあるのだと解いているわけです。

ただし、言われたことや決まったことをただこなすだけの仕事からは、喜

びや幸福感は生まれないそうです。
　こうした仕事だけをやっていくことが、「仕事＝苦痛」という方程式を作り出します。
　ではどうすればよいのか。
　ヒルティさんは次のように言っています。

「ええか、仕事を「遊び」と捉えるんや。鬼ごっこでもスキーでもサッカーでもそうやけど、みんな遊んでる時はもっと面白うなるように工夫するやろ？仕事も同じなんや。決められたことをただおんなじようにやるんやなくて、もっと楽しくなるように工夫したりやり方にバリエーションをつけてみたりして、創造的に働くんや。そうやって楽しくなるように工夫しながら働いて、誰かの役に立ってみい。ああ、仕事っておもろいなぁ、こうやって誰かに喜んでもらえて幸せやなぁと感じるわけや。ええか、遊ぶように働くんやで。」

　さすがは世界三大幸福論の著者。
　言うことが違います。
　なぜこの話を紹介したかというと、最近の一年生の様子を見て、まさにヒルティの言葉が頭に浮かんできたからです。
　特に、先日の探究発表会のコンテンツの作り方や発表の仕方などには、それぞれの「工夫」がたくさんつまっていました。
　発表を聞く人のことを思い浮かべながら、あれこれ工夫している姿は実に楽しそうで、創造性にあふれていました。
　もちろん、探究の学習だけでなく、プロジェクトの学習にも随所に創造的工夫が見られます。
　「レンガってこうやれば見つかるんじゃない？」
　「森づくりに必要なお金を生み出すためには…」
　他にも、教科の学習や学習以外の場面でも、そうした姿が散見されるようになってきました。
　先日、私のアイパッドが不調で、せっかく作成した授業コンテンツがスクリーンでうまく動かないことがありました。
　仕方なく、私は別のタブレットを取りに行こうかと思ったのですが、教室を離れる「わずかの間」がもったいないのも事実です。

そうした私の心情を読み取ってなのか、その時クラスにいたある男の子が声を上げました。

「先生、僕の iPad から映そうか？僕できるよ。」

確かに以前そのコンテンツを子どもたちに配ってはいましたが、こんなに素早く、しかも１年生からそんな提案が出てきたことに驚きました。

「本当にできる？」

と私が聞き返すが早いか、その子はもう動き出しており、あっという間に接続を完了してコンテンツを滑らかに動かしてくれました。

教室にはその瞬間に、盛大な拍手が沸き起こりました。

授業に空白が生まれなかったことも有難かったですが、そうやって授業に単なる受け身で行うのではなく、能動的に創造的に取り組む姿に私は大きな成長を感じたのでした。

ちなみに先の世界三大幸福論の中で、私のお気に入りのアランは同著で次のように述べています。

「悲観主義は気分によるものであり、楽観主義は意志によるものである」

この言葉に続いて、アランは次のようにも記しています。

「気分にまかせて生きている人はみんな、悲しみにとらわれる。否、それだけではすまない。やがていらだち、怒り出す」「ほんとうを言えば、上機嫌など存在しないのだ。気分というのは、正確に言えば、いつも悪いものなのだ。だから、幸福とはすべて、意志と自己克服とによるものである」

特に好きで、二十代の頃から何度も繰り返し読んでいる一節です。

気分に任せて生きると、人は悲観的になる。

意志を持って生きると、人は楽観的になる。

非常に哲学的な描写であり、もちろんこれをこのまま子どもたちに伝えても中々響きません。

外国語を理解する時よろしく、翻訳する作業が必要になります。

例えば、以前のコスモスハーモニーに「南極の魚」について述べたことがありました。

あれはまさしくアランの著作を私なりに解釈・翻訳して書いた通信です。

再掲します。

「南極の魚」と聞いて、何を思い浮かべるでしょうか。
大きい魚をイメージするでしょうか。
それとも小さい魚をイメージするでしょうか。
それとも、あんなに寒い所にそもそも魚はいないと想像するでしょうか。
実は、これはちゃんといます。
しかも、生態にある特徴があります。
南極の魚は、エサが少ないことなどから、海の底の方でじっとして動かず、上からオキアミなどのエサがすぐ近くに落ちてくるのをじっと待っているだけだといいます。
すぐ横の方にエサがあっても、そこへ行って食べようとする意欲もありません。
意欲を出さなくとも、じっとしていればエサが落ちてきて、それだけで生きていけるといいます。
たとえが良いか分かりませんが、私は、子どもたちを「南極の魚」のようにしてはならないと思っています。
大人でも（もちろん私を含めて）、すぐ楽な方に傾くクセがあります。
子どもたちも、放っておけばどんどん楽な方へと流されていきます。
だまってじっとしていれば、大人が何でもかんでも優しくていねいにかみくだいて教えてくれる。
考えなくてもよい。
ただ勉強をしていればよい。
いわれた通りに行い、いわれたことを覚えればよい。
こういうことばかりに慣らされてしまうとこわいです。
いわゆる「指示待ち人間」を育てていく土壌であるともいえます。
だからこそ、与えられるばかりではなく、子どもたち自身が新しい知を求めて自分から動きまわるような状態を作りたいと思っています。
知を求めたり、知を探したり、知を掴んだり。
自ら動く力は、今後一章自分を支えてくれるまさに「生きる力」となっていくからです。
ですから、学習は単なる学習ではなく、人生そのものなのだと思います。
どんな風に取り組むか、自分の苦手や課題にどう向き合うか、乗り越えるのか、あきらめるのか、努力するのか、逃げるのか。

学習を通して、生き方を学べるようになれば最高です。
ですから、子どもたちが自ら動き始める瞬間を、あらゆる学習において追い求めたいと思っています。

能動的に、意志をもって、という内容を易しく書くと上のようになります。
もちろん、年齢が進めば書きぶりも変わります。
以前 6 年生を担任していた時の通信には、アランの幸福論をもとに次のような通信を書いたことがあります。

「楽しい」と「楽しむ」は、わずか一文字の違い。
しかし、この２つの言葉には天と地ほどの差がある。
「楽しい」は、基本的には誰かから、何かから、与えられるものだ。
映画を見て、楽しい。
ゲームをして、楽しい。
音楽を聴いて、楽しい。
外部からの刺激を受けて、自分の中で起きる感情が「楽しい」である。
受動的であり、反応的でもある。
別に、この感情自体に問題は無い。
ハッピーな感情なのだから、大切な役割をもっている。
しかし、この誰かが与えてくれる「楽しい」ばかりを追い求めるようになると、途端に様々な問題が起きてくる。
「～だからつまんない」
「もっと楽しくしてよ」
「～は面白い！」
「こんなのダメじゃん」
「全然楽しくない」
自分の心がプラスに反応すれば、即「楽しい」。
自分の心がマイナスに反応すれば、即「つまんない」。
自ら進んで努力することは無く、一旦立ち止まって考えることもなく、事態の原因をいつも周りのせいにする。
こういう姿を、俗に「お客様感覚」という。
自分は常に誰かから“してもらう”存在で、それが楽しいかどうかのジャッジを下すのが自分。

こうなってしまうと、人は周りを責めるようになる。
「他責思考」という。
自分を省みることなく、「楽しい」という感情をプレゼントしてくれない環境や他人を責めるようになるのである。
結果的にどんな状態になるのか、一度想像してみると良いだろう。
部活がつまんないのは〇〇のせい。
勉強が面白くないのは～～のせい。
仕事が面倒くさいのは～、自分の生活が上手くいかないのは～。
このようにして生きていくと、人生は常に「環境次第」「運次第」になる。
自ら人生を切り拓いていくことはできない、と認めているのと同じである。

一方、「楽しむ」はどうか。
「楽しむかどうか」は自分で決めるものだ。
与えられた刺激が仮に不快だったとしても、それに対する反応を変えていくことだってできる。
解釈を変えたり、行動を工夫したり、自分の意志や思考によって未来を決定していくことができるからだ。
そういった意味で、「楽しむ」は能動的であり思考的であるといえる。
「こうすれば楽しくなりそう。」
「これでだめなら次はこうしたらいいんじゃない？」
「こんなやり方もいいかもよ。」
考え方は前向きになり、生産的になっていく。
さらに、周りの人や環境を責めることは無くなっていくだろう。
人生は、自分のアイディア次第、行動次第で次々と開けていくこととなる。
楽しい人生ではなく、楽しむ人生を歩んだ典型ともいえるだろう。
みんなにも、楽しい人生ではなく楽しむ人生を進んでいってほしい。
その楽しむためのアイディアとして、先日教室で「反応」の話をした。
「何か反応する」、例えば返事、例えば表情、例えばうなずき、例えば視線。

楽しむ人生を歩んでいる人は、反応が豊かだ。
まずは、反応してみよう。
反応とは、選択である。反応とは、行動だ。
無反応・非選択ではなく、反応を豊かにして、人生を楽しんでみよう。

１年生の子どもたちが学んでいる様子の中にも、「“楽しい”を求める」よりも「“楽しむ”ためにどうするか」を考える姿が着実に増えてきています。

ヒルティやアランがいうところの「幸福論」を、６歳や７歳にしてすでに実践し始めている姿に、大きな逞しさを覚えています。

[１学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ (google.com)]